



つなぐ

Tsunagu
2012

ともに歩む希望の道

A Road We Walk Together Toward Hope

O Caminho de Esperança que Seguimos Juntos

一起朝着希望迈进

目 次

四旬節愛の献金趣意書	2
2011年四旬節キャンペーン報告	3
四旬節第1主日に 「忘れないで」 大震災が呼び起こす愛の実践を心に刻み込みながら	4
四旬節第2主日に 東日本大震災 カリタスジャパンの対応	8
四旬節第3主日に 島での復興 桂島区長の描く夢	12
四旬節第4主日に 神様いるから大丈夫 石巻で被災して	16
四旬節第5主日に それでも福島は 苦しみから創っていく未来	20
受難の主日に しっかりつながっていますか？ 今、生きるのがつらいという人と	24
結び・ふりかえりのヒント	カリタスジャパン担当司教 幸田和生 28
お知らせ 社会系委員会発行物のご案内	32
2012年四旬節キャンペーン資料の問い合わせ先一覧	34

—この冊子の使い方—

今年は〈ふりかえりのヒント〉を最後の「結び」にまとめて入れました。四旬節の間、六つの記事を1週間に1話ずつ主日の福音に合わせて読み、その後〈ふりかえりのヒント〉を使って、個人やグループで折りを深めることができます。

英語、ポルトガル語、中国語訳のご案内

第1話「忘れないで」の英語、ポルトガル語、中国語訳をカリタスジャパンのホームページに掲載しました。以下のURLからダウンロードできます。英語、ポルトガル語、中国語圏のお知り合いの方にご案内ください。

英語(English) http://www.caritas.jp/contributi/pdf/shijun2012_en.pdf

ポルトガル語(português) http://www.caritas.jp/contributi/pdf/shijun2012_pt.pdf

中国語(中文) http://www.caritas.jp/contributi/pdf/shijun2012_cn.pdf

四旬節 愛の献金

昨年の四旬節は、3月11日に発生した東日本大震災とともに始まりました。大切な人を失い、またいつもの日常を失い、苦しみのただ中にある人々と歩みをともにし、また祈りのうちに一致しながら、私たちは40日間を過ごしました。

あの大震災から一年を迎えた今年の四旬節は、悲しみを乗り越え、復興への力強い歩みを始めた多くの方々と祈りのうちに一致しながら、信仰における希望の光をしっかりと見つめて歩んでいきたいと思えます。

教会の伝統は、四旬節に祈りと節制と愛の業という三つの取り組みによって、一人ひとりが信仰の原点を見つめ直すように教えています。日本の司教団も、四旬節の精神に皆がよりふさわしく生きていくことができるように、愛の業の積極的な実践を勧めています。目に見える行いの一つが、カリタスジャパンの担当する四旬節献金です。この献金は、皆様の四旬節における愛の実践を具体化するものとして、世界各地の緊急災害援助にとどまらず、「いのち」を守るための活動や、少数民族の子どもたちの教育支援、そして女性の自立支援など、時間をかけて取り組まなくてはならない課題のために活用されます。カリタスジャパンが行う国内外の支援は、皆様の募金によって支えられていますが、とりわけその約3分の1は、この四旬節献金によって支えられております。

今年の四旬節にも、あなたの分かち合う愛の心が世界の多くの人に届きますように、四旬節献金にご協力ください。

2012年2月22日 灰の水曜日

カリタスジャパン責任司教 タルチシオ 菊地 功
担当司教 ヤコブ 幸田和生

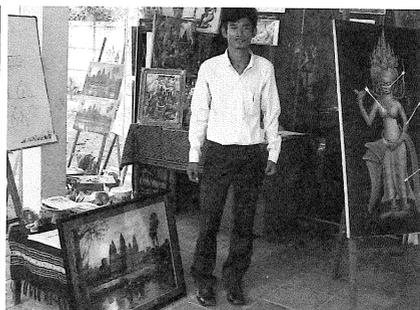
2011年四旬節キャンペーン報告(2010年9月～2011年8月)

四旬節献金総額 58,349,625 円

主な援助先		(円)
パキスタン	アフガン難民教育支援	3,504,102
イラク	母子保健支援 2010	4,219,000
ネパール	子どものための教育センター支援	1,249,314
スリランカ	女性移動労働者支援	1,631,200
ヨルダン	イラク難民のためのコミュニティセンター支援	2,452,200
モンゴル	就学前教育支援	4,078,000
ケニア	農業支援	2,093,851
バングラデシュ	少数民族教育支援	10,207,627
カンボジア	地域医療支援	2,513,700
カンボジア	若者職業訓練支援	2,513,700
イラク	母子保健支援 2011	3,861,000



パキスタン／アフガン難民教育支援



カンボジア／若者職業訓練支援

「忘れないで」

大震災が呼び起こす愛の実践を心に刻み込みながら

あの日、あの時、自分はどこで何をしていたのだろうか、流れ行く時間の中のある特定のひとときを明確に記憶に刻み込むことは、それほど頻繁にはありません。しかし、2011年3月11日の午後2時半過ぎ、自分がどこにいて何をしていたのか、明確に記憶に刻み込まれているのではないのでしょうか。

私は秋田での卒業式出席を終え、羽越線の特急電車に乗って新潟へ戻る旅の途中でした。電車が急停止してそのまま停電。山形県の庄内地方にある鶴岡駅の少し手前でした。夜7時過ぎにバスの迎えがあるまで、繰り返す余震の中で、連絡も取れずにじっと待っていました。たまたま持参していたラジオのスイッチを入れると、臨時ニュースは津波への警戒を呼びかけていました。「宮古では10メートルを超える津波」というアナウンサーの声が、記憶に刻み込まれています。

岩手県の宮古は私の生まれ故郷です。その地域一帯は過去に何度も巨大津波に襲われた体験があり、それが故に十分な備えをしているはずでした。「10メートルくらいなら何とかなるだろう」と安心したことを記憶しています。しかし、その日の深夜、やっと帰り着いた新潟の司教館でテレビをつけてみると、目に飛び込んできたのは画面に映し出されるすさまじい津波の様子でした。それ以降、繰り返しテレビで、そしてインターネットで流された映像は、今でも恐怖とともにしっかりと心と記憶に刻み込まれています。

多くの方が突然の災害に翻弄される中で、愛する人を、頼りにする伴侶を、家族を、友人を失いました。地震が発生する直前まで営んでいた生活が、その時を境に一変しました。あれから一年が過ぎようとしている今でも、復興の道のりはその険しさだけが見いだされます。

険しい道のりを歩むこの時、エマオへ向かう弟子たちと歩みをとみにされた主イエスの姿に倣いたいと思います。復興の道を歩んでいる被災者の方々と歩みをとみにしながら、その心の思いに耳を傾け、一緒になって希望への道を探りたい。不条理な出来事の中からも、神は新しい希望を芽生えさせることを私たちは信じています。主イエスご自身の受難と死は、弟子たちにとってまさしく理解不能で不条理な出来事であったことでしょう。すべての希望は失われた、と弟子たちはそう感じたに違いありません。悲しみと不安に沈む弟子たちに、天使は主が生きておられると告げます。希望の光が射し込みます。この大震災がどうして発生したのか、どうしてこのような出来事に巻き込まれたのか、その答えを見いだすことは容易ではありません。しかし、復活の主イエスへの信仰に生きる私たちは、この不条理な出来事からも神は希望を生み出すのだと信じて、生きたいと思います。

震災の発生から半年以上が過ぎた昨年9月の末、さいたまと新潟の司祭団と一緒に、被災地を訪れて祈りを捧げる機会がありました。

気仙沼教会を訪れた時のことです。教会と幼稚園は比較的高台にあり、津波は教会の手前で止まりました。しかし気仙沼は炎に包まれ、幼稚園の職員は、残された子どもたちと恐怖の一夜を過ごしました。副園長先生がその体験を聞かせてくれました。そして終わりにふと、「なんか、だんだんと忘れられていくような気がして」と言われました。その一言が私の心に突き刺さり、消えません。

1996年の夏、私はアフリカの旧ザイルにいました。ルワンダ難民キャンプ視察も三度目となった時のことです。

ある難民キャンプでそのリーダーに、何か必要なものはないかと尋ねた時のことです。わざわざそんなことを尋ねるまでもなく、難民キャンプは「不足」のオンパレードでした。ないないづくしのただ中で、明日への希望も見いだせず、キャンプに生きていた難民たち。当然私は、「モノ」へのリクエストを期待して質問したのです。ところがリーダーの答えは、予想に反したものでした。

「神父さん、あんたは日本から来たのか。それじゃあ、日本に帰ったら、まだ我々がいることを伝えてくれ。我々は世界から忘れ去られてしまったんだ」。

歴史に残る虐殺事件に続いて200万人を超える難民が発生した当初、難民キャンプには世界中の救援団体がスタッフやボランティアを送り込みました。その様子は、ボランティアのオリンピックと現地では言われていました。しかし事態が長期化するにつれ、世界の関心は薄れていき、救援団体も徐々に引き上げてしまった。そんな中で取り残されてしまった人たちの「忘れ去られた」という言葉は、私の心に突き刺さりました。

それ以来、世界には「問題」の解決が二通りあるのだと実感してきました。客観的な出来事としての「問題」は、世間の関心が薄れるとともに意識されなくなっていくことで、ある意味「解決」していきます。巷間で取りざたされなくなり、誰も意識しなくなるからです。もちろん実際の問題は何も解決しておらず、そこには当事者だけがあとに残されていきます。私たちは意識しなくなることで「解決」を目指すのではなく、当事者が取り残されることのないように、と寄り添いながら、本当の解決を目指す姿勢でいたいと思うのです。

大震災からの復興には時間がかかる。その通りでしょう。目に見える復興は、時間と資金さえ注ぎ込めば、いつの日か達成されるかもしれない。しかしそこに、「忘れ去られた」と感じる、現場の人たちが取り残されるようなことがあってはいけない。「ともに歩む」をかけ声倒れに終わらせないために、何ができるのか。四旬節にあって祈りのうちに考えてみたいと思います。

宮城県の亙理教会でミサをともにさせていただいた後、地元の信徒の方が被災地を案内してくれました。押し寄せた津波が、絨毯で覆い尽くすかのように町をのみ込んでいった海岸沿いの平野部。何もなくなった真っ平らな土地に道路だけが残され、廃墟のようなビルがそここに残る。信徒の方が、自分の家に戻るだけなのに道に迷ってしまう、と冗談交じりで話してくれました。津波の前にはそこにあった目印ともいうべ

き町の風景は、根こそぎ奪い去られてしまいました。残されたのは、自分の記憶に刻み込まれた姿と異なる町の有様。目印を失って道に迷ってしまうのです。

それは単に風景が変わっただけなのでしょう。そうではありません。何十年も費やして築き上げてきたそれぞれの人の歴史そのものが失われたのです。多くのボランティアが取り組んだ、流された写真を洗って持ち主に戻すという作業も、昔を懐かしむためではなく、まさしくそういった写真が一人ひとりの歴史そのものなので、大事な作業だったのではないのでしょうか。大震災は、その地域に住む多くの人の歴史を破壊し、奪い去っていったのです。

建物の修復に手を貸すことはできても、歴史を修復する作業に協力することは容易ではありません。過去を取り戻すことができるのは、その歴史を刻んできた本人だけなのです。しかし私たちは、新しい歴史とともに刻んでいくために、歩みをともにすることができるのです。

四旬節は、「祈り」と「節制」と「愛の業」という三点をもって、信仰を問い直す「時」を私たちに与えています。「祈りと節制」は、自分自身の内的な問題と考えることもできるのですが、「愛の業」は、その対象となる「相手」の存在なしには成り立ちません。すなわち、四旬節にあたって私たちが自らの信仰を顧みるためには、自分自身の内面のふり返りとともに、自分と他者とのかかわりの中で、「愛の業」をどのように具体的に実践しているのかという、自分自身に対する問いかけが不可欠なのです。

今年の四旬節にあたり、カリタスジャパンはこの小冊子を東日本大震災の体験に焦点をあてて編集いたしました。大震災に際しての愛の業の実践を、心に深く刻み込む四旬節にいたしましょう。

☞ 〈ふりかえりのヒント〉 29 ページ

東日本大震災

カリタスジャパンの対応

地震が起きた

2011年3月11日午後2時46分、東日本はとてつもない揺れに襲われました。日本国内観測史上最大と言われる、マグニチュード9の地震は、波高10m以上、最大遡上高40mにも及ぶ大津波を引き起こし、そこにあるすべてのものをのみ込みました。津波は、海上の波が高くなって押し寄せる現象ではなく、海底から海上までの海水全体が地上に押し寄せる現象です。その海全体が、5回も6回も繰り返し押し寄せては引いていくのです。その結果、ヘドロが地上に持ち込まれ、同時に地上のありとあらゆるものが海にさらわれていきました。

人、建物、車、砂防林の松、堤防やテトラポッドといったものが海にのみ込まれ、地上に押し寄せられた現場は、人が頭で理解できるような範囲をはるかに超えています。実際にかれきの原と化した現場に立って周りを見回してみても全く現実感が無く、「一体これは何なのだ」と戸惑うばかりです。

津波がもたらす被害

津波被害は、被害に遭った所とそうでない所が、目で見てもはっきりと分かります。全壊世帯の人々は、そこに住むことができません。半壊世帯の多く、すなわち1階に津波が押し寄せ、2階は無事で、なおかつ家の基礎や柱がしっかりしている家では2階で生活が続ける人が多くいます。道を挟んで向かいの家は全壊でも、自分の家は全く被害がないというケースも多くあります。

震災直後、ライフラインやインフラが破壊された時、半壊や無傷の世帯の人々は、住む家は残っていても食糧や暖房設備が手に入らない状況の中で、「全壊の人に比べればうちはまだいいから」と言って、救援物資をもらいに行くことを遠慮しました。地盤沈下によって毎日満潮時に1階に海水が入っ

てくる家に住みながら、未だに「うちはまだいいから仮設住宅には入らん」と言う方がいます。

全壊、半壊。仮設住宅、自宅。こうした、被災状況における微妙な違いが津波被害をさらに複雑なものにしています。

緊急支援

カリタスジャパンは震災発生から半年を緊急支援期間と位置づけ、主に「物資支援」と「生活環境改善支援」を実施しました。

物資に関しては、避難所での食糧、衣料、その他生活用品の配布と、ボランティアベース^{注1}として提供された教会での、近隣の方々への物資の配布を行いました。全てを流されてしまった人々にとって、食糧や衣料、毛布は当然ですが、その他さまざまなものが必要になります。

例えば、家族を亡くした時に、線香一本あげられないことは辛いものです。また、がれきの原と化した地域で、子どもが外を歩くにはヘルメットが必要でしょう。毎日、避難所から壊れた自宅の整理に出かける人々には、自宅近辺に仮設トイレがなければなりません。カリタスジャパンはそうした細かいニーズに応えるべく、行政と交渉し、必要なところへ必要な物資を届けてきました。

次に、生活環境の改善ですが、主に半壊世帯や道路の側溝などの泥かき、がれきの片付けがこれにあたります。阪神淡路大震災以降、災害時のボランティア活動は日本社会に定着してきた感がありますが、今回も非常に多くのボランティアが日本中から駆けつけました。これまで約3100人のボランティアがカリタスジャパンの活動に参加し、その多くがこの泥かき、がれき撤去作業に取り組んでいます。

泥かきといっても、ただ家から泥をかき出せばいいのではありません。まず壊れた家具を運び出し、濡れた畳を捨て、水で床上の泥を洗い流します。一通りきれいになったら床板をはがし、床下の泥を流します。それから消毒のために消石灰を撒き、床板を戻し、新しい畳を入れるのです。そのほかにも、まだ使える家具や食器の洗浄、庭のヘドロの撤去など、実に多くの作業が必要です。

こころの復興

こうした物資の提供や作業は、ただ機械的に行われるものではありません。物資の提供にはそれを受け取る人と手渡す人がいます。作業には家の持ち主が立ち会います。場合によっては、清掃をするよりも一緒にお茶をすすりながら話を聞く方が重要なこともあります。

がれきが片付き、家がきれいになっていく一方で、人々のこころの復興はなかなか進みません。行方が分からない家族の搜索、自宅の片付け、物資の入手と、一刻も早く日常生活に戻るために休む暇もなく動き続ける人々が、ホッと一息つける喫茶店やレストラン、公園などは、もはや被災地にはありません。

そんな中、カリタスジャパンが運営する物資配布の場は、人々が自由に腰を下ろして話すことのできる無料のお茶飲み処になっていきました。そこで話をすることによって、人々は初めて自分がどれほど悲しみ、怒り、我慢しているのかを知ることになるのです。その上で、自分の言葉を通して感情を外に出していくことは、こころの復興の大切な一歩です。そこで話に耳を傾けることもボランティアの重要な役割で、現在は仮設住宅などへも出向いて、同様の活動を行っています。

地域の復興

被災地では、人々は家族や家、財産だけでなく、仕事も奪われました。津波被害を受けた沿岸部では、多くの人々が農業、漁業に従事していましたが、かなりの人々がそれらの仕事を失いました。田や畑は塩害のために春になっても農業を再開できず、海底はがれきで埋まり、漁具や養殖のための設備、水産加工工場なども壊滅的な被害を受けました。

こうした状況は、ただ塩害を取り除き、設備や備品を購入し、工場を直せばそれでいいわけではありません。元々こうした地域は若い世代の都市部への流出が著しく、「漁は自分の世代でおしまいだ」と考えていた年配の人々が非常に多かったのです。こうした人々が農業や漁業を再開するには、物やところだけでなく、地域全体、ひいては日本社会のしくみが変わっていかねばなりません。

そんな中でカリタスジャパンは、小さな地域でカキやワカメなどの養殖を

続けてきた人々とつながりを持ちました。そこでは、地域全体がともに知恵を出し合ってどのように養殖を再開していくことができるのかを相談する寄り合いが開かれています。カリタスジャパンもその場に毎週顔を出し、「私たちは復興への歩みに寄り添っていきたい」という姿勢でかわりを続けています。必要な設備のために資金援助をするというのは二の次で、寄り添う姿勢こそが、人々が地域として自立し、仕事を再開していくために最も大切なことなのです。

教会としての取り組み

カリタスジャパンは今回の復興支援を主に、震災で影響を受けた教区が行う支援活動への協力という形で実施しています。

仙台教区は、今回の震災に対する復興支援として現地の教会をボランティアベースとして開放し、多くの信徒がその運営に協力しています。一刻も早く日常の生活を取り戻したい信徒にとって、教会の聖堂にボランティアが寝泊まりしている状況は非日常でしょう。そういった一人ひとりの理解と協力の上に支援活動が成り立っています。

また、日本中のすべての教区が支援と司牧のために募金をし、人材を派遣しています。女子の修道会ではシスターズリレー^{注2}という枠組みを作り、150人を超えるシスターたちが現地の活動を根っこで支えるために駆けつけました。全教会として支援活動に携わるこの状況は、教会が社会の中で果たす役割の新たな可能性を示しているのではないのでしょうか。

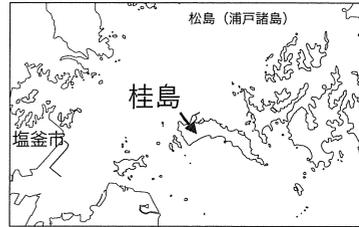
(文中の内容は全て2011年10月現在)

注1：ボランティアの生活・活動拠点。

注2：日本全国のさまざまな女子修道会からシスターを1～2週間交替で現地に派遣するしくみ。

島での復興 桂島区長の描く夢

日本三景の松島には、桂島という小さな島があります（宮城県塩釜市に属する浦戸諸島の一つ）。今回の震災では、津波により被害を受け、海で生きる人々は仕事を失い、生活は大きく変わってしまいました。島に対する支援は全般的に遅れがちで、桂島でも、震災後2カ月経って初めて市の社会福祉協議会が入ったほどです。



そんな中、桂島の人々は自分たちで助け合いながら復興を目指して歩んできました。カリタスジャパンのボランティアはそんな桂島の人々と歩みをとみにしてきました。震災について、桂島で区長（島のまとめ役）を務める内海^{うちうみ}糸蔵^{いとくら}さんに話を伺いました。

震災当日

11日はね、新しく区長になったから（内海さんは震災の5日前に区長になった）三役会議をしようと思って、準備をしてたんだ。部屋の掃除をして、仏様とか仏壇をきれいにし、線香立てを持って。そうしたら今までに経験のないようなおっきな地震が来て、それも異常に長かったもんね。それで「ああー、これは少しばかりの津波来るんじゃないなー（小さい津波ではないだろう）」っていう風に思いましたね。

「ああーこんじゃだめだ」と思って、すぐ浜に行行ってほら、消防のあるところの詰め所に行って、バイクで行ったんだよな。早く行動取んなければなので、みんなでどのような体制を取ってやろうかつうことで、消防団の人たちと話して、彼らはすぐに（手助けの必要な）お年寄りの人たちを車に乗せて。走り回ったんです、広報の車で。「津波来るぞー、はやぐー、避難

しなきゃなんねーぞ」って。

それから私は避難所の方準備しに行ったんだよね。消防の人たちは避難を手伝って。津波来た時は学校の避難所にいたったから、して雪降ってたから、私は津波の来る時は分からなかったな。それどころでねがったね。準備の方でね。

私も実家に、実家はこのすぐ下なんだけど、そこさ家の兄貴とか義理の姉さんがいたから、「津波来っから逃げなきゃいけねーど」って呼びに行ったんだ。けども、「ここにいるからいい」って言う。「そんなこと言わねーで早く行くべっちゃ」って言うんだけど「いいからいいから」って。だから「津波来るから俺、上さ行かなきゃなんねーから行くから」って言ったのさ。そしたら二人で津波被って。ま、助かったけどさ。それだけがね、ま、救いっつうかなんつうか。

初期の活動

ま、それからだね、本番がね、始まったのがね。「さー、これからみんなをどうやって引っ張っていこう」っつうことでね。考えたって分からないよな。そんな経験なんて誰もいないだもんや。220人の人をどのようにして引っ張っていこう。不安を与えないで、どのようにこれからやっていっていいんだらうと思ってね。一番最初に考えついたのはね、とにかく誰にも頼らない。人に頼ったんではだめだから。人は嘘つくからね。頼らない。本気でみんなと付き合う。嘘はつかない。お話するときは目を見てやっていこう。

情報をどっから入れっか。当初電話も何もつながらなかったもんで、たまたま一人の電話が、防災課の人とつながって交信できたので、それが最初唯一の救いだっただよね。してそれから、とにかく役所に行って情報を仕入れてきて、物資をもらったりっていうことをずいぶん続けたね。一週間どころでない。もっと続けたな。それで、「いいど、あんたたち、ここさ来ても大して変わらないから毎日来なくても」って言われたけども、でも行がなければ何の情報も入ってこない。とにかく行けば、せっかく来たんだからこういうものも持ってけとか、そういうこともあったよね。朝8時とか、ちょうど始まるころに合わせて、船に乗って塩釜の役所に行って。(島では)私、朝必ず(避難所となっている)体育館と職員室、ご飯食べるところでお年寄りの人と話して、「今日はこういう

ことあるから」つうことでの確な情報を入れんだっちゃ。そうやって年寄りを安心させて、それからこっち（島の対策本部）さ来てミーティング。今日は誰それさんどこどこ行って仕事やるとか。そんなこと細やかにやってきたんだね。

島民のために

自分のことは何もしないっちゃね。1カ月半くらいは着の身着のまま。長靴脱がねで腰掛けさ座って。布団さも寝なかったよな最初な。そんでみんなから「体持たねからなんぼでも横になった方がいいんでねか」って言われてな。寒かったから、班体制を作って、（発電機やストーブの）灯油とかガソリンとか、夜中でも入れたりして。私は夜中に見回り、必ず2回くらい回ったもんね。そういうのお年寄りの人たち見てっから安心感もあったと思うんだね。知らんぷりでなく、「寒くないですか」とか声かけたりして。

最初大変なのは、人の心をどのようにして掴んだらいいのかなって。避難所の皆さん、どのようにして安心してもらえるかなって日々考えてたね。皆さんの顔見ながら。いろいろあるよね。220人もいるんだから。考えも何も。でもね、当初は良かったんですよ。皆とにかく一緒になって力合わせてやんなきゃなんねえな、つうことでずっとやってきたからね。時間経ってくると、だんだん出てくること（不満など）もありましたけど。

人々の変化

変わりましたよ。やっぱりひと月、ふた月、み月、それなりに変わっていったね。気持ちがね。最初は一体になってやって、だんだん変化を求めるとでねえのすか、避難所の人たちも。最初は私が取り仕切ってやってきたけども、後ボランティアさん来て、付き合ったりなんたりするのは、もう自分たちでやってくれれば心も安らぐでしょうから。私はもう入り込まないで、いろいろ言わないで、自分たちの世界を作ってもらって。（島民たちに）任せようようにしてきたね。だから途中で、「なんだ区長このごろ知らんぷりして」なんて、そんなような声が聞こえるような時もあったけど、まあ、それはそれで、彼らがそれがいいと思ってやってるんだから。

外部からのボランティアは、来る人たちは拒まないで私はやっていたから。

来てくれる人は拒まないで受け入れるって決めたの。疲れるよ。エネルギー使うし。でもよそから来る人たちの話聞いたり、こういうことお願いしますと言ったり。そういうのが良かったんでないかね。あと避難所で、ものをもらい続けるっていうのもどうなんだべな。もらえるものは何でももらえて。そういう気持ちになるのも当たり前なんだけどね。そういう意味で変わったな。

家がある人の顔も見たくないとか、そんなこと言ってる人もいるって。でもね、誰したんでもねえものね。神様がしたんだもの。だからね、心はずいぶん変わったんだと思うよ。何も言えね。お前ら、ああだとかこうだとか。言ったら終わってしまうから。聞き流すほかないよね。でもみんな心開いてお話ししてくれるからいいっちゃね。開いていかなければね。

これからの桂島

私は最初、報道関係なんかを入れるのが嫌だったんです。でも考えてみっと、誰も言ってくれる人いないんだよね。報道関係に大きく取り上げてもらわなきゃね。島はこうだあだあってね。ずいぶん報道は来たよ。一緒に避難所に報道と泊まって、良かったよ。そうすると必ず石浜(桂島の一部で、海水浴場がある)の遊歩道さ連れていくんです。そうすると、ここは何もないけど、自然がきれいなところだし、ああ、こういう所で生活できるならいくらいいんだかってね。

こんな大きな津波が来るなんて誰も考えなかったよね。多賀城(塩釜市の隣の市)の総務部長さんがお見舞いに来た時、いろいろ相談して、衆議院議員に連絡してみたんです。そうしたらすぐ来てくれて。最終的には医療、福祉関係の施設を作るくらいまで進めていかねば。ただ住宅建てて終わりじゃなくて。この際だからこの島を大きく変えていくようなことやっていかねばなと思って。花とか何とか、四季折々のものも植えていきたいよね。

何で盛り立てるって言えば、やっぱり観光しかないんでないかね。たくさんの人が来てくれて、ここで取れるおいしいもの食べてもらって、旅館やっている人たちもいるから。地元の体制をどのように作っていくかだな。一人でやろうたってだめだから。

神様いるから大丈夫

石巻で被災して

アンナ（仮名）さんは9年前にフィリピンから日本に嫁いできました。子どもはおらず、義理のお父さんと体の弱い旦那さんとの3人暮らし（文中では、それぞれおじいちゃんとお父さん）。今回の震災で二人を津波で亡くし、今は一人宮城県石巻市の仮設住宅で生活しています。

避難所での生活—おじいちゃんとお父さんを捜して

避難所はね、食べ物たくさんあるよ。でもね、夜はね、避難所で眠れないでしょ。だってみんな廊下とかに寝て、誰かトイレ行くときスリッパで歩くけど、寝てる人が「うるさい！早く寝ろ！」とか怒るから。それで私は友だちの家とか、アパートとかに寝るの。それでね、（避難所では）朝になったらみんな掃除するでしょ。お掃除になったらまたけんかするの。「何で俺がこんなことやるんだ」って。

私ね、3月の12日からいろんな避難所に（おじいちゃんとお父さんを）探しに行ったの。ほんとに泥ひどかったですよ。大きい車とかトラックとか、船とか、ヘドロ。ここまでよ、ヘドロ（膝のあたりをさして）。それとね、死んだ人がいっぱいあるから。12日の朝、いろんな避難所に行って、いない。全部歩いて行ったよ。一日10時間、12時間。だから今でも膝がおかしいですよ。1カ月くらい10時間、12時間歩いてたんですよ。水とおにぎりとかパン持って。それでも、どこの避難場所行ってもいないから、どこさ行くかな—って。

津波の前にね、不思議なことあったんですよ。お父さん体悪いでしょ。それで私クリーニング屋で毎日働いてたけど、津波の何日か前に、お父さんが、「俺は悪い旦那だな」って言うの。「もっとちゃんとするからな」って。そんなこと言ったことなかったですよ。それでね、津波が来た日、私が仕

事に行く時、玄関で「行ってきます」って言ったら、「じゃあね、バイバイ」って言ったんですよ。いつもそんなこと言わなかったですよ。

避難所で、私毎日朝7時におにぎり食べたら二人を探しに行くでしょ。どこにいるかな。かわいそうだなって。どこに行けばいいか分からないですよ。ただ歩くだけ。どの避難所行ってもいないから。それで夕方5時ごろ自分の避難所に戻るの。

遺体安置所へ

それで、総合体育館（遺体安置所）に行ってみたの。近く。自衛隊がいっぱい。それで、死んだ人の写真がいっぱいあるの。ああ、（遺体確認が）できるかな、怖いな。それで、「あの、探してるんですけど」って言って名前、住所、地震の日の服の色とか全部書くの。それで、写真を見るの。かわいそうよ。人間かわいそう。お年寄りがね、目を開いたまま。ショックですよ。何かどこかぶつかったりしてて。かわいそうな。

おじいちゃんとお父さん、どうかなって。でも総合体育館は少ない。30人くらい。そこにはいないですね。それでお線香あげて。それで警察に、「他にもありますか？」って聞いたら、「遠いですよ」って。「どこですか？」って聞いたら矢本（石巻市の隣に位置する東松島市）だって。

何時間も歩いて行ったの。迷って迷って、着いたらアルバムすごく分厚いの。ほんとにいっぱい。それで中に入って、箱を開けて見るの。かわいそうよ。ほんとに。でもおじいちゃんとお父さんはいないの。それで、別の所、青果市場に行ったの。もっといっぱいの人。私いっぱい見えたよ。かわいそうな。でも菊の花がちゃんと置いてあるの。

結局見つからなくて。それで避難所帰ったらもうご飯なくて。それで隣の人に、「どこ行ってたの？」って聞かれて、「総合体育館」って言ったら、「どうして入ってきたの？ 塩持ってきたの？ だめでしょ」って言われるんですよ。「誰かここで死んだらどうするの？」って。それで私は「ごめんね。でも塩持ってないし、私だけじゃないよ、みんな行ってるよ。でもみんな塩持ってないよ」って。「もし誰かが死んだら、それは神様が決めたことでしょ」って。

お父さんに再会

本当に疲れて、「おじいちゃん、お父さん、助けて」って。二人が私の近くでいてくれるのは分かるけど、私は二人がどこにいるのか分からないから、助けてって。それでもいいでしょ。それで1カ月くらいしてから、お父さんのいところ、「アンナちゃん、もう探さなくてもいいよ」って。「アンナちゃん一人でしょ。体壊したらどうする」って。でも探さなきゃかわいそうだから行くでしょ。

それから、お父さんのお兄さんから電話来たの。「お父さん見つかったよ」って。「どこですか」って聞いたら「青果市場」って。「えー、私4回も行ったよ」って。行ってみたら、お父さんはもう骨だけで、DNA検査しかないんだって。それは1年かかるんだって。それで私は「写真見せてください」って。本当にお父さんですよ。「服は？」って聞いたら、「服はない」って。津波でぐるぐるってなって、服はどこか行っちゃったんだって。「お願いします。これ本当にお父さんです。体のここに点々あるでしょ。これお父さんです」って。それでもだめで、「じゃあ箱（骨箱）を触らせてください」ってお願いして。それで見たら、小さい箱で。

私は触りながら、泣きながら「お父さん、お父さん、ごめんね」って。間に合わなかったから。助けに行きたかったけど、津波が早かったから。私は歩道橋のところだね、津波が来たの。だから行けないでしょ。だからごめんねって。それでお線香あげたの。

そしたら三日後に、お兄さんから電話来たの。ちゃんとお父さんだって分かったって。（本来ならDNA鑑定の結果を待たなければならないところ）でも警察から電話来たの。それで「神様ありがとう」って。

仮設住宅に入って

一人はほんとに寂しいよ。6月にここに来た時は毎日泣いてたよ。毎朝二人に話しかけて。夜はテレビ3時までつけばなし。でも隣のおばさんが、「だめよアンナさん、毎日泣いて話してるアンナさん見たら二人が天国行けないよ」って。だからやめたの。

ここでは毎日ラーメンとかお米とかもらい物がある。あと毎週水曜日集

会所でお料理とかマッサージとか。あと外国人のプロテスタントの人が来てみんなでお祈りするの。今は義援金?と見舞金で生活してるの。

生活保護はだめでしょ。体悪い人とか年寄りの人はいいけど、私みたいに若くて元気な人はだめですよ。がんばらなきゃ。私みたいな人が生活保護もらったらお金たくさんかかって石巻はみんな困るでしょ。

8月に私のお姉さんが亡くなって、(来日してから)初めてフィリピンに帰ったの。フィリピンのお父さんも病気があって、大変だから1カ月いたの。フィリピンは変わってないな。仕事もないし、物は高いし。家族はすごく少ない給料で生活してるよ。それで、毎日少しずつお米を買って食べてる。大変だよ。でも、少しずつ隣の家の人と食べ物を分け合ってるの。芋の葉っぱとか。それはいいですよ。

日本ではそれはいいですよ。でもね、この仮設では、おばさんたち豚汁好きだから、私、大きいなべで作って持ってくるの。それで、「あら、ありがとー」って。そしたら「お返し」っていういろんな物くれるの。私「いいから、おばちゃん」って言うんだけど(笑)。毎日夕方4時くらいからみんなでお話するんですよ。6時くらいまで。

これからの生活

ハローワーク行ったけど、車の免許がないから仕事ないの。それで、お友だちがね、魚屋さんを紹介してくれるって。でも、私これまでずっと8年くらいクリーニング屋で働いてたでしょ。魚屋さんはやったことないからどうかなって。ほんとに仕事があるか分からないし。

でも大丈夫。神様いるから。だから毎日元気ですよ。毎日寝る前に、一日ありがとうってお祈りするよ。みんなうつ病?になったりするでしょう。でも私は神様がいるから元気ですよ。日曜日は教会にミサに行くよ。前はお父さんと一緒にミサに行ってたよ。今は一人。でもフィリピン人のみんなにも会えるし、今度はハロウィンパーティーあるって。仕事も大丈夫でしょ。まだ若いし、元気だし。神様いるから。

それでも福島は 苦しみから創っていく未来

震災を通してつながる教会

3月11日の東日本大震災から約7カ月経った10月9日、福島県南相馬市の原町教会において、今回の震災で死亡または行方不明となったおよそ2万人の方々のための追悼ミサが行われました。ミサの直前には、津波が押し寄せた北泉海岸^{きたいずみ}でともに祈りを捧げて、花束を流し、津波で亡くなった方々の追悼式を行いました。今回の追悼ミサは、同じ福島県にあっても海岸から離れていて津波の被害は受けなかった福島市の松木町教会の信徒が、津波で大きな被害を受けた原町教会の信徒と連携して、ともにミサ^{あづか}に与ることができたということに大きな意味があります。

松木町教会から原町教会へは一山越えて、路線バスでは2時間以上、車で直行しても1時間半かかる遠い距離にあります。福島第一原子力発電所から北に24.5キロの距離にある原町までの間には、高濃度の放射線が残る町を通過しますが、そこでは昼間でも人かげは見られませんでした。今まで家族の声でにぎわっていたであろう家々の窓はカーテンで閉ざされ、ビニールハウスや家畜小屋の中は草が生い茂り、全く生活感がない町へと変化しています。そのひと気がない町を30分ほど通過し、山を越え、海岸に向かって移動するうちに、景色は



祈りを込めて献花

一変しました。そこは津波の傷跡が生々しく、破壊された家屋の残骸、あらぬ場所に積み重なっている車、壊れたままのガードレールなどが視野に飛び込んできました。それでも追悼式が行われた北泉海岸の波打ち際には、全く何事もなかったかのように、穏やかな波がゆったりと寄せ返しているのです。

その後、そのまま原町教会へ移動し、地震発生時刻に合わせて開始した追悼ミサに与りました。この日の前日改修工事が終了したばかりの小さな聖堂には、現地に留まっている約10人の信徒に、松木町教会の信徒、シスター方、東京や横浜の両教区の信徒など、約100人が一堂に会しました。仙台教区の平賀徹夫司教と東京教区の幸田和生補佐司教、現地の司祭など5人の共同司式で行われたミサは、厳かな中にも、このような多くの信徒とともに捧げるミサは初めてという喜びと、福島 of 遠く離れた二つの教会が繋がったという喜びにあふれたのです。

大震災の中に見えた光

追悼ミサの後、福島市内で幼稚園から短大までの学校教育に携わっている先生方に、震災発生からその後の様子についての話を伺うことができました。

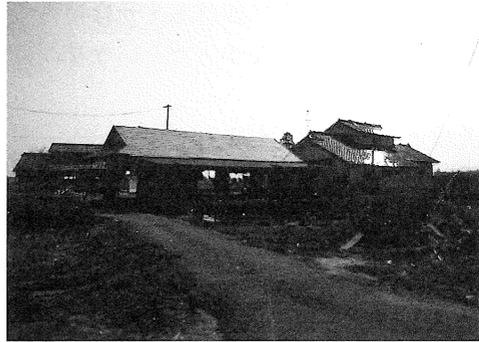
まず、幼稚園舎は全壊したものの、学校での犠牲者は出なかったこと、一人の短大入学予定者が母親とともに津波にのまれ、写真での入学式となってしまったことなどが知らされました。そして、学校に残っていた生徒たちは、運動場に避難し無事であったこと、その日はめずらしくみぞれが降り、非常に寒い日であったこと、学校は翌日から繰り上げて早い春休みとしたが、連絡手段がなく、テレビを通して春休みを伝えたこと、春休みの間、学校敷地内の除染など、できる限りの安全確保を行ったが、転校していく生徒も多いことなど、緊迫した様子が次々と報告されました。

また、現在も福島の人々の話題は放射線のことばかりで、家に帰っても家族は放射能の不安の中におり、子どもたちが落ち着いて勉強できる環境ではないという指摘もありました。

そのような中、短大の生徒を受け持つ先生の次のような話に、苦しみの中に一筋の光を感じました。「大震災の前、学生たちは、携帯電話でしかお互いにつながっていない、いわば携帯電話だけのつきあいが当たり前でした。この問題をどうすればよいかと考えていた矢先に震災が起こったのです。ところが震災は、まわりの人々がお互いにどれだけかわりながら生きているかを若者たちに教えてくれました。学生たちは、自らも被害を受けているのに、自分たちでグループを立ち上げ、避難所にボランティアに行きました。今もいろんな場所に呼ばれて活動しています。震災はつらく、痛みを伴うものでしたが、大きな恵みもいただいたのです」。

福島が抱える原発の苦しみ

福島が今回受けている痛みで、最も大きなものは、何と云っても見通しの立たない放射能汚染問題です。地震と津波の傷跡は、多くの人たちの助けによって、がれきが撤去され、少しずつ姿を消しています。ところが、福島県では、2011年5月時点で例年より4割以上も多く、多くの自死者の存在が報じられました（警察庁統計）。

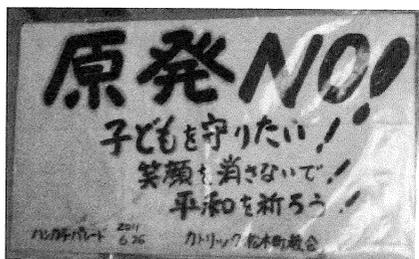


主を待つ家

人の営みが奪われた町を通り過ぎた時、その思いが想像できました。心の支えを含めたすべてのものを失い、これから何を目的として生きていけばよいのか。生きる希望を失い、自ら生命を絶つ以外、解決の方法を選ぶことができなかつたのだと。ふるさとを離れ、避難生活を余儀なくされている方だけではなく、今福島に住む方々の中にも、これからの生き方を思い描くことができず、迷いの中にいる人が大勢いるのです。

話を伺った中の一人の先生が語られました。「福島を去るのも、福島に残るのも、自分の生命を自分で守る事です。どちらが良いかは分か

りません。だからこそ、その決断は自分です。教育で最も大切なことの一つは、人に左右されるのではなく、自分で考え自分で決断する力を養うことです」と。また、原爆で両親を亡くされた先生は「私は今まで一度も原発反対を叫んできませんでした。何故なら、自分はイデオロギーの問題として原発反対を叫んでいる人たちとは違う、と思っていたからです。でも今は違います。人間存在の危機から未来を創っていかねばなりません。だからこそ『脱原発』と言いたいのです」と語ってくれました。



「1万人ハンカチパレード(6.26)」での脱原発プラカード

地震や津波は、一瞬にして私たちの目の前の景色を一変させ、生活を奪ってしまいました。そして自然災害に伴う原発事故は、私たちを不安と恐怖のどん底に陥れました。人が、人のために作った原子力発電所が、地球生物の生命を奪い、生活を奪う。これはあまりにも大きな犠牲を伴った人災といえるのかもしれませんが。人との共生、自然との共生が、言葉だけのものになってはならないと感じます。この苦しみから、私たちはどのような未来を創りだすことを問われているのでしょうか。

日本カトリック司教団は、2001年の『いのちへのまなざし ～21世紀への司教団メッセージ～』の中で、東海村の臨界事故に触れています。そして2011年11月8日には、公文書「いますぐ原発の廃止を ～福島第一原発事故という悲劇的な災害を前にして～」^{注1}において、原子力発電所の廃止について示しています。

注1：カトリック中央協議会のホームページからご覧になれます。

<http://www.cbcj.catholic.jp/jpn/doc/cbcj/111108.htm>

☞ 〈ふりかえりのヒント〉 30 ページ

しっかりつながっていますか？

今、生きるのがつらいという人と

カリタスジャパン啓発部会は、2007年から「自死と孤立」をテーマとして、現代社会の課題に取り組んでいます。自死は社会問題の共通の原因ともいえる「孤立」の悲劇的な結果です。社会だけではなく、カトリック教会においても、タブーのように扱われ、表立って語られることがありませんでした。しかし実際には、教会共同体にあっても、決して遠い問題ではありません。啓発部会では、身近な問題として「自死と孤立」について、皆さんとともに考えていきたいと思っています。

現状—13年連続年間3万人以上の自死者

日本では、1998年以来13年間、自死者（不審死、事故死を除く）が年に3万人を超え、高い自殺率が続いています。内閣府（警察庁・自殺統計）によると、日本の自死者数は1955年～1997年までは、およそ2万人台で推移していましたが、翌1998年に突如としておよそ3万2千人の方が自死によって亡くなっています。それ以降、3万1千人を下回ることはありません。

また、3月11日の大震災では、農家や畜産関係者の自死という痛ましい報道がなされました。地震・津波・放射能汚染、それに伴う風評被害など、いくつもの困難が重なり、助けを見出せず、絶望の淵に追いやられ、やむにやまれず、自ら生命を絶つ。自死が、自己責任という個人の問題ではないということ突き付けられました。

2006年10月、自殺対策基本法が超党派の議員で構成された有志による議員立法として成立しました。「自殺は社会の問題でもある」と示され、国の責務と同時に、国民一人ひとりにも理解と関心を促す努力をするよう明示されました。

しかし、私たちは法整備だけでは済まされない「自死と孤立」の現実を、

どのように受け止めて、取り組んでいけばよいのでしょうか。もしかしたら、自死を防ぐために、私たちが見失っている大切なことがあるのではないのでしょうか。

秋田県の取り組み

カリタスジャパンでは、自死についての勉強会を数回開催しました。その中で、日本でも自殺率が高いと言われる秋田県で、地域の自殺対策に取り組んでいる方から、話を伺うことができました。

秋田県では、2001年からモデル地区となった4つの町で、行政が自殺防止事業に取り組みました。行政が事務局を担当し、住民が主に活動するという形で、「ともに話し合う場づくり」から始まります。自殺防止というと、水際で防ぐ方法もありますが、地域における取り組みでは、何気ない会話の中で、悩みを話すという雰囲気自殺防止につながっていきます。ですから、自然な形を大切にしています。いきなり「悩みを語りましょう」といっても難しいですが、「どう？ 元気？」というような自然なやり取りから、互いに打ち解け、悩みを話せるようになっていきます。

このことは自死遺族にとっても大事なことです。「自死」はどうしてもタブー視されがちです。ですから、遺族の方々は体験を語るができないのです。そとで語れないのですから家庭でも語れません。「なぜ死んでしまったのだろう」という思いを抱え、自分のせいではないかと追い詰めてしまいかねません。不幸にも身近な方が亡くなった時に、その時の思いを早い時期に話せるような空間があるということは大切です。だからこそ、日ごろから悩みを話せる雰囲気、関係を作っていくことは重要なのです。

地域の具体的な活動では、「悩みを話す」というテーマを分かりやすく劇仕立てにして、町民の前で演じる取り組みや、週一回、町の施設の一角を借り、メンバーがお茶をだしながら「気軽に話をしよう」とサロンを開いています。

これらは、自殺防止のためのネットワークづくりの取り組みとして始めたものですが、サロンにかかわっている方は「自殺予防に取り組んできたなら、結局その活動は地域づくりだった」と気付いたそうです。自殺対策の取り組みから、地域のさまざまな問題や課題にも向き合う地域づ

くりへとつながっていったのです。

「プライバシー」の壁が阻む「つながり」

このような秋田での地域の取り組みが、全国各地で同じように進められるとは限りません。その要因の一つに、人と人との間にある「プライバシー」という壁の高さや距離が挙げられるのではないのでしょうか。

「プライバシー」の尊重は大切なことです。一方で、その壁の高さや人との距離を緩やかに調整しながら、安心してかかわれる人や場を持つことも大事です。お互いの壁が高く、風通しが悪いままでは、孤立を招き、防げる死も防げない状態を生み出す可能性があり、自死を「その人個人の問題」として終わらせかねません。死にたいほどつらい思いをしている人がいても、そのつらさが見えず、つらい気持ちを共有できなければ、自死は防げないのです。「死にたい」と言える関係を持って、はじめて自殺防止へとつながっていくのです。

人は独りであっても、一人では生きていけません。「無縁社会」と言われるような、つながりのない、またつながりを得られない人々を生んでしまった現在の社会の状態では、社会の組織機能だけを強くしても、孤立している人をさらに追いやってしまう危険性があります。

「死にたい」気持ちを受け止める

私たちは、普段「あり得ないことは起こらない」と考える傾向にあります。大切な人が、大変そうであっても「まさか死なないだろう」と思い、一方で悩んでいる人も「大切な人には心配をかけたくない」という気持ちから、つらい気持ちを隠してしまうことがあります。また、「何か変だな」と思っている、そのまま放っておいては、救える生命も救えません。

「死にたい」という気持ちの裏には「死にたくない」「生きていたい」という気持ちがあります。それは、「本当は死にたくない」、でも、このように苦しい状態、現状が続くならば、生きていくのはつらい、限界だ、死ぬしかないと感じ、追い込まれているということです。

また、うつ状態に陥ると、心が沈み、「死にたい」と感じる傾向が強くなる場合があります。うつ病の症状が、そのような気持ちにさせてしまうの

です。うつ病の多くは、医療機関などで治療をすれば、症状も改善されていくといわれています。

これらのことを理解しながら、今のその人の気持ちに気付き、受け止め、じっくりと話を聴く。批判や励ましをせず、死なないでほしいという気持ちで、寄り添うことが大切なのです。また、自殺防止は一人ではできません。様々な専門機関、相談窓口などと協力し、「生きてみよう」と思えるように、支援をつなげていくことも必要です。

隣人のいる教会へ

自死は悲しいことです。防げるものなら防ぎたい。悩み、苦しみに追いやられ、やむにやまれぬ上でのことであるなら、なおさら、その悩み苦しんでいることに気付くことで、私たちにできることが見えてくるのではないのでしょうか。

自死は、特別な人たちのうえに特別な理由で起きるわけではありません。年間3万人以上という自死者を生みながら、私たちは「自死」という現実を、他人ごとや、あり得ないこととして終わらせていないのでしょうか。

自死への取り組みは長期にわたるものです。それは、今まで無関心であったこと、偏見によって遠ざけられ、放置されてきたことだからと言えるかもしれません。私たちは、できないとあきらめて投げ出したものを一つひとつ拾い上げ、関係ないと思っていた事がらをかき集め、つなぎ直すことが求められています。一人ひとりが意識して行動しなければいけない地味な努力を担えるようになればと思います。

☞ 〈ふりかえりのヒント〉 31 ページ

結び・ふりかえりのヒント

昨年は復活祭の日付が遅く、四旬節の初めの日（灰の水曜日）は3月9日でした。そしてその翌々日、3月11日に東日本大震災が発生しました。直後の大津波は東北・関東の太平洋沿岸を襲い、2万人近い人がその犠牲になりました。また福島第一原子力発電所の事故は、多くの人々の生活に重大な影響を与えました。昨年の四旬節は、まさに大震災の渦中で過ごすことになりました。

それから1年、今年も四旬節が巡ってきました。四旬節小冊子『つなぐ』の編集を委ねられている私たちカリタスジャパンにとってこの1年は特別な1年でした。カリタスジャパンには援助部会と啓発部会がありますが、援助部会は総力を挙げて被災地支援に取り組むことになりました。啓発部会は以前から「自死と孤立」というテーマに取り組んでいますが、そこでも震災から始まった被災者の生活の孤立・困窮の問題とのつながりを強く意識するようになりました。これらの結果、今年のこの四旬節小冊子は、大震災関連の記事がほとんどになりました。

今も切実に大震災の後遺症に苦しむ方々がいます。しかし、同じ日本に住んでいても、遠く離れているため、日常生活ではほとんど震災のことを意識しなくなっている方も多いでしょう。それでも1年前の記憶を呼びさまし、今も苦しみと困難の中にある方々のことを思わずに、今年の四旬節を過ごすことはできないと私たちは考えました。そのためにこの小冊子をお役立ていただければ幸いです。

昨年までと同様、四旬節の六つの主日に合わせて、この小冊子の六つの記事の一つずつ読み進むことができるようにしてあります。個人的に読んだ後、その日のミサの福音とつなげてふり返るため、あるいは、グ

ループで読んで分かち合いをするための簡単なヒントを、今年をまとめてこの結びに掲載することにしました。

四旬節第1主日 「忘れないで」(マルコ1・12 - 15)

四旬節第1主日のミサの福音では毎年、イエスの活動開始に先立つ40日の荒れ野の誘惑の場面が読まれます。四旬節とは復活祭の前の40日の断食(節制)の期間を意味する言葉ですが、その原型がこのイエスの荒れ野での日々です。マルコ福音書は、マタイやルカ福音書と異なり、サタンの誘惑の内容を伝えません、サタンの誘惑とそこでの神の守り(天使たちが仕えていたこと)を伝えています。

聖霊が人を神に結びつけ、人と人との愛によって結ぶ神からの力だとすれば、「悪霊」とか「サタン」とは、人を神から引き離し、人と人との関係を引き裂く力のシンボルだと言えるでしょう。四旬節はイエスとともにこの分裂の力と戦い、それに打ち勝つ時です。

「忘れないで」とはまさにこの悪霊に打ち勝つためのキーワードではないでしょうか。私たち一人ひとりへの呼びかけを感じとりたいと思います。

四旬節第2主日 東日本大震災(マルコ9・2 - 10)

四旬節第2主日には毎年、山の上でのイエスの変容の場面が読まれます。そこに見られたイエスの光り輝く姿は、イエスが受難と死をとおって受けることになる栄光の姿でした。それを一瞬、弟子たちに垣間見させ、弟子たちを受難の道を歩むイエスに従うよう強め、励ますのがこの出来事の意味だと言えます。

教会の使命とは、突き詰めて言えば三つのことです。福音を伝えること、ともに賛美と感謝をささげること、そして愛を生きること。大災害という非常事態を前に、このうち「愛を生きること」が他のすべての活動にまさって、緊急に問われることになりました。しかしそれは他の二つのことを忘れてしまうことではなかったのです。教会が本当に周囲の人々と喜びも悲しみもともにしながら歩むということを意識し直すチャ

ンスであり、その中にこそ福音が新たに響き渡り、そこにこそ新しい祈りが生まれるという体験でもあったのです。

四旬節第3主日 島での復興（ヨハネ2・13 - 25）

四旬節第3～第5主日のミサの福音は、3年周期（A、B、C年）の各年によって特徴が異なります。今年（B年）は、イエスの「死と復活」そのものを深く味わうためのヨハネ福音書の個所が選ばれています。第3主日はイエスがエルサレムの神殿から商人たちを追い出したという個所ですが、ここでの中心は「三日で建て直される神殿」、つまり、死んで三日目に復活するイエスご自身こそが、本当の意味での神殿（神がそこに住まい、人が神と出会う場）だということです。

津波によって、小さな島の人々の生活は一変しました。すべてが奪われ、人と人との関係も傷つきました。そこからの復興とは、ただ元通りの生活が取り戻されることではなく、新たなコミュニティと新たな産業の創出を意味しています。そこにこそ神の力が必要とされるのでしょう。

四旬節第4主日 神様いるから大丈夫（ヨハネ3・14 - 21）

「人の子も上げられなければならない」。これは直接的にはイエスが十字架の木の上に上げられることを指していますが、同時にイエスが神のもとに上げられることをも暗示する言葉です。そして神がイエスを世に与え、しかも十字架の死に至るまで与え尽くされたこと、そこにヨハネ福音書は計り知れない大きな「神の愛」を見えています。

どんな苦しみも決して無意味ではない。悲しみの果てにはきっと喜びがある。すべてが奪われてもなお希望がある。そう信じられるのは、私たちがこの神の愛を知っているからです。四旬節はこの大きな神の愛に出会い、その愛を深く味わう時でもあります。

四旬節第5主日 それでも福島は（ヨハネ12・20 - 33）

ヨハネ福音書のこの個所は、マタイ、マルコ、ルカの福音書にある、受難を前にしたゲッセマネの祈りの場面と通じる個所です。イエスはこ

れからの受難の道が神の望みに従う道であることを確信し、宣言しています。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」。地に落ちた種は、本当は死ぬわけではありませぬ。麦の殻の中に閉じこもっているのではなく、外から水分や養分を取り入れ、その殻をこわして、もっと豊かないのちに生まれ変わるのであります。イエスは、神に完全に自分をゆだね、人をこの上なく愛し抜かれました。イエスのいのちとは、まさにこのような「つながりの中にあるいのち」だったのであります。

福島の人々が体験した地震・津波・原発事故という悲惨な出来事は、私たちがこれまで、どのようにこのつながりの中にあるいのちを生きてきたか、そして今、生きようとしているかを問い直すものでもありました。そして、それはまた、イエスのいのちに結ばれていきたいと願う私たち皆に問われることでもあります。

受難の主日 しっかりつながっていますか？（マルコ 15・1 - 39）

今年の受難の主日の福音は、マルコ福音書の受難物語です。マルコが伝える受難のイエスは力ある方ではなく、「無力で苦しむただの人」だと言えます。その極限は十字架上での叫び、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」に表れています。それでもマルコはこのように息を引き取ったイエスの姿を見たローマ軍の百人隊長の口をとおして、「本当にこの人は神の子であった」という信仰宣言をしています。マルコ福音書の受難物語のどこに救いの希望を見いだしたらよいのでしょうか。それは無力で苦しむだけの十字架のイエスと、やはり苦しみと無力さの中にある私たちのつながりではないでしょうか。

「死にたいほど苦しい」という誰かの叫びを受け止めることは簡単ではありません。しかし、イエスこそがその苦しみをともに担ってくださる方だと私たちは信じています。イエスのこの受難の姿を見つめながら、私たちがどのように重荷を担い合うことができるかを、問い続けたいと思います。そこにこそ復活のいのちへの希望があるのですから…。

〈日本カトリック司教協議会の社会系委員会発行物のご案内〉

社会司教委員会

教皇ヨハネ・パウロ二世 『広島平和アピール』 1981

発行 2011.5.1

「平和の巡礼者」としての教皇様の来日三十周年および五月一日の喜ばしい列福式を記念して、深い敬意と感謝のうちに今一度共に思い起こすため、ここに「広島平和アピール」を日本語と六ヶ国語で言語ごとに発行することにいたしました。そこに示された真の平和への道筋を皆で着実にたどって行きたいとの願いと祈りを込めて。(前書き「今なおこだまする『広島平和アピール』」より抜粋)

HIV/AIDS デスク

世界エイズデー ポスター (B4判)

エイズ啓発/情報ミニカード (名刺大)

発行 2011.12.1

「愛ってなに?」「あなたの大切な人から『HIV抗体検査を受けたら陽性だった』と聞いたらどんな行動、言葉がけをしますか?」という問いかけに対して、カトリック学校などの若者から寄せられたメッセージをポスターにした。



日本カトリック正義と平和協議会

リーフレット『原子力発電は“温暖化”防止の切り札ではない!地球上の生命環境にとって最悪の選択…』 B3判1枚刷16頁

発行 2010.12.20

小出裕章(京都大学原子炉実験所助教)の監修のもと、原子力発電の危険性、問題点をコンパクトに示したリーフレット。3.11以後日本社会が直面している原発問題に具体的指針を示し、好評を得ている。

正義と平和講演録 vol.5『国是と信教の自由』入門憲法20条 A5判48頁

発行 2011.10.11

カトリック20条の会の主催で、仙台(2010年5月)、北九州(2011年5月)で行ったシンポジウムの記録。信教の自由とは何か、支配権力に対する信仰者、宗教の抵抗と協調の歴史を、カトリックとプロテスタントそれぞれの側から解き明かす。巻末には2007年に発表された「信教の自由と政教分離に関する司教団メッセージ」を掲載。

日本カトリック難民移住移動者委員会

講演録『改定入管法問題—2012年から実施される改定入管法を検証する—』
佐藤 信行 (RAIK 所長/外キ協事務局) A5判 28頁 発行 2011.7.10

2009年7月、出入国管理及び難民認定法(入管法)・入管特例法・住民基本台帳法が改定され、新しい制度が実施されるまでに1年と迫っている。新制度の中にどのような在日外国人の尊厳と自由を奪う問題点が含まれているのかを検証するRAIK(在日韓国人問題研究所)所長・外キ協事務局・移住連の運営委員などを担っている佐藤信行氏による講演会録。

日本カトリック部落差別人権委員会

小冊子『誰と共に生きるのか ハンセン病とキリスト教 —信仰と人権のかかわりをめぐって—』 A5判 92頁 発行 2008.3

2009年4月1日、「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律(ハンセン病問題基本法)」が施行された。この冊子は、ハンセン病問題の理解を深め、差別偏見を克服するための啓発資料である。

〈カリタスジャパン発行物のご案内〉

小冊子『自死の現実を見つめて —教会が生きる支えになるために—』 A5判 44頁
無料配布(送料別) 発行 2010.11.1

「自死と孤立」というテーマで行った啓発部会の活動を小冊子に表した。メッセージ「自死の現実を見つめて」、自死の実態について、自死についてのQ&A、「カトリック教会における意識調査」報告、相談窓口などを掲載している。

講演録『虐待・暴力と福音』 B5判 128頁 頒布価格250円(送料別) 発行 2008.10.1

2006年11月に実施したカリタスジャパン主催の第5回カトリック全国社会福祉セミナー「虐待・暴力・性暴力に被害者の視点で向き合う」の全ての講演をまとめた。

『叫び 合本:1997~2002』(四旬節キャンペーン小冊子) A5判 222頁
頒布価格400円(送料込) 発行 2003.1.12

『ひびき』(2005~2007 ※2003、2004は在庫切れとなっております。ご了承下さい)、『つなぐ』(2008~2011)のバックナンバーご希望の方は事務局にお申し込みください。送付いたします。

2012年四旬節キャンペーン資料の問い合わせ先一覧

2012年四旬節キャンペーン資料として例年のように、小冊子『つなぐ2012』、ポスター、献金趣意書（英語、韓国語、ベトナム語、スペイン語、ポルトガル語、タガログ語、中国語）、募金箱（紙製・組み立て式）、献金袋を用意しました。各小教区には灰の水曜日前に届くよう手配していますが、追加要求などにつきましては、下記の各所属教区宛にお問い合わせ下さい。

なお、『つなぐ2012』には点訳本、録音テープが用意されています。

- | | | |
|--------|---|---|
| 札幌教区 | 〒 060-0031
札幌市中央区北一条東 6-10
札幌教区本部事務局 | Tel: 011-241-2785
Fax: 011-221-3668
E-mail: diooffice@csd.or.jp |
| 仙台教区 | 〒 980-0014
仙台市青葉区本町 1-2-12
仙台教区本部事務局 | Tel: 022-222-7371
Fax: 022-222-7378
E-mail: kyoku-office@sendai.catholic.jp |
| 新潟教区 | 〒 951-8106
新潟市中央区東大畑通一番町 656
新潟教区本部事務局 | Tel: 025-222-7457
Fax: 025-222-7467
E-mail: nig-cur@ecatv.home.ne.jp |
| さいたま教区 | 〒 330-0061
さいたま市浦和区常盤 6-4-12
さいたま教区本部事務局内
カリタスさいたま | Tel: 048-831-3150
Fax: 048-824-3532
E-mail: saitama-kyoku@mbm.nifty.com |
| 東京教区 | 〒 112-0014
文京区関口 3-16-15
東京教区本部事務局 | Tel: 03-3943-2301
Fax: 03-3944-8511
E-mail: info@tokyo.catholic.jp |
| 横浜教区 | 〒 248-0006
鎌倉市小町 2-14-4 カトリック雪ノ下教会
横浜教区福祉委員会 | Tel: 0467-22-2064
Fax: 0467-22-4199
E-mail: yokohamafukushi@yahoo.co.jp |
| 名古屋教区 | 〒 466-0037
名古屋市昭和区恵方町 2-15
名古屋教区社会福祉委員会 | Tel: 052-852-1426
Fax: 052-852-1422
E-mail: caritasnagoya@aju-cil.com |

京都教区 〒 604-8006
 京都市中京区河原町通三条上ル Tel: 075-211-3025
 京都教区本部事務局 Fax: 075-211-3041
 E-mail: cathonbu@mbox.kyoto-inet.or.jp

大阪教区 〒 540-0004
 大阪市中央区玉造 2-24-22 Tel: 06-6941-9700
 大阪教区本部事務局 Fax: 06-6946-1345
 E-mail: y.shiki@osaka.catholic.jp

広島教区 〒 730-0016
 広島市中区鞆町 4-42
 広島カトリック会館 Tel: 082-221-6017
 広島教区本部事務局 Fax: 082-221-6019
 E-mail: tob7105@mocha.con.ne.jp

高松教区 〒 760-0074
 高松市桜町 1-8-9 Tel: 087-831-6659
 高松教区本部事務局 Fax: 087-833-1484
 E-mail: catholic-takamatsu@takamatsu.catholic.ne.jp

福岡教区 〒 810-0028
 福岡市中央区浄水通 6-28 Tel: 092-522-5139
 福岡教区本部事務局 Fax: 092-523-2152
 E-mail: cdf-curia01@mbe.nifty.com

長崎教区 〒 852-8113
 長崎市上野町 10-34 Tel: 095-842-4450
 長崎カトリックセンター Fax: 095-842-4460
 E-mail: cnkh211@nagasaki.catholic.jp

大分教区 〒 879-0471
 宇佐市四日市 196-3 Tel & Fax: 0978-32-3636
 カトリック宇佐教会 森園神父
 E-mail: jb-yasukun@nifty.com

鹿児島教区 〒 892-0841
 鹿児島市照国町 13-42 Tel: 099-226-5100
 鹿児島教区本部事務局 Fax: 099-225-0440
 E-mail: kagoxavi@po5.synapse.ne.jp

那覇教区 〒 902-0067
 那覇市安里 3-7-2 Tel: 098-863-2020
 那覇教区本部事務局 Fax: 098-863-8474
 E-mail: chancery78@image.ocn.ne.jp

事前に当協議会事務局に連絡することを条件に、通常の印刷物を読めない、視覚障がい者その他の人のために、録音または拡大による複製を許諾する。ただし、営利を目的とするものは除く。なお点字による複製は著作権法第37条第1項によりいっさい自由である。

この冊子の編集にあたり、差別語、不快用語については、厳正な検討を加えて注意を払いましたが（面談者が話し言葉で使っている用語、用法はそのまま使用している場合もあります）、お気付きの点がございましたら、ご指摘、ご教示いただければ幸いです。

この小冊子は点訳・録音テープの作成をロゴス点字図書館にお願いしています。2010年1月1日より著作権法が改正され、これまで視覚障がい者のみに貸し出されていた点字図書館の録音図書（テープ・CD）が高齢、病気などの理由で活字の本を読むことが困難な人にも貸し出されることになりました。ご希望の方はロゴス点字図書館（電話：03-5632-4428）までお問い合わせ下さい。

四旬節キャンペーン小冊子 No.26 2012年

「つなぐ 2012」

2012年2月22日 発行 ©カトリック中央協議会2012年

編集 カリタスジャパン

発行 カトリック中央協議会

〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10

日本カトリック会館内 電話 03-5632-4411

カリタスジャパン 電話 03-5632-4439（直通）

FAX 03-5632-4464

E-mail info@caritas.jp

URL <http://www.caritas.jp/>

印刷 精興社

Printed in Japan

表紙：中村貴也



カリタス ジャパン

〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10 日本カトリック会館
TEL:03-5632-4439 FAX:03-5632-4464 E-mail:info@caritas.jp